



平成26年7月17日

## 独立を望まない植民地

### ーカナダ経済発展に対するイギリス帝国の意義ー

概要：岡山大学大学院社会文化科学研究科（経）の福士純准教授は、カナダ各地にて収集した歴史文書の分析を元に、19世紀後半以降のカナダ経済発展の歴史的展開を検討した結果、イギリス帝国植民地であった当該期のカナダは独立や自立した経済発展を志向せず、帝国内部の一植民地としての発展を目指すだけでなく、率先して帝国経済の発展に尽力していたということを明らかにしました。本研究成果は、今まで国内外の学術雑誌等にて発表されてきましたが、『カナダの商工業者とイギリス帝国経済 1846～1906』（刀水書房、2014年）という一冊の書籍にまとめられ、2014年5月に刊行されました。

イギリス帝国内の一植民地であったカナダは、19世紀後半には小麦などの一次産品供給地としてイギリスとの間に垂直的分業関係を構築し、イギリスを「中核」とする帝国経済構造の「周辺」としての役割を担っていました。しかし従来の研究では、カナダはこのような経済構造から脱却し、独立した国民経済の構築を志向してきたと理解されてきました。これに対して、岡山大学大学院社会文化科学研究科（経）の福士純准教授は、カナダ各地の文書館にて収集した膨大な各種経済団体の歴史文書や政治家・商工業者の個人書簡を読解、分析することによって、この時代のカナダの人々が帝国からの自立ではなくむしろ帝国との関係緊密化を志向し、統合が強化された帝国経済構造内においてカナダ経済のみならずイギリス帝国経済全体の発展を企図していたという新説を提唱しました。

イギリスからの移民によって形成されたカナダは、イギリスや他の植民地と文化、アイデンティティを共有しており、その感情的紐帯を基礎に特惠関税に基づく帝国内の経済的紐帯強化を図ろうとしていました。このように感情的、経済的紐帯によって密接に結びついた帝国内にて、カナダは従来の研究が指摘するように、イギリス向けの一次産品輸出を拡大しました。その一方で、カナダは保護関税を通して製造業を振興することによって、帝国内における「第二の工業国」として他の植民地へ工業製品輸出を拡大したのであり、帝国に留まることがカナダの経済発展に寄与したのです。それゆえ、カナダは帝国経済構造の「周辺」からの離脱ではなく、むしろもう一つの「中核」となることで、イギリス帝国を支えたと本研究は論じています。

この成果は、先進国の一つに数えられながら、国外でも十分に検討されてこなかったカナダ経済発展過程の特殊性を解明するのに寄与するものと思われます。

#### ＜お問い合わせ先＞

岡山大学大学院社会文化科学研究科（経済）  
准教授 福士 純  
（電話番号）086-251-7537